

平成25年度

練馬区教育委員会特別支援学級発表校

<研究構想図>

学校教育目標

心身ともに健康で自主的な人間の育成をめざす

- 一 自律性を伸ばす
- 二 実践力を身に付ける
- 三 連帯感を深める

目指す学校像

明るく元気で知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成

目指す生徒像

思考力・判断力に富み、実践力のある生徒
他者との円滑な人間関係を築くことの出来る生徒
健康な身体をもつ生徒

特別支援学級の活動経緯

平成15年度に本校の特別支援学級（F組）の教室が本校舎に設置され、通常の学級と交流する機会が増えてきた。F組の生徒が交流学級での活動を通じて、社会性や協調性を高めることを目指している。また通常の学級の生徒も共に活動することで、目指す共生社会に向けて、障害に対する理解や他者を助ける心を育てたい。

特別支援学級生徒の実態

本学級は、1年生3人、2年生4人、3年生5人、計12人で2学級・担任3人の知的障害特別支援学級である。生徒は皆、明るく、個々の課題に応じて、様々な学習活動に前向きに取り組んでいる。また、通常の学級との交流活動も定着し、学校行事や給食などで交流を図っている。

研究主題

「共生社会を目指した交流活動」～交流及び共同学習の取組を通じて～

中村中学校における特別支援学級と通常の学級との主な交流及び共同学習

○年間を通じた日常的な交流活動

- ・ 毎日の交流給食（交流学級での給食活動）

○行事における交流活動

- ・ 運動会（朝練習、放課後練習、交流学級との保健体育授業）
- ・ 合唱コンクール（朝練習、放課後練習、交流学級との音楽授業）
- ・ 修学旅行・校外学習（交流学級での事前学習・事後学習）

練馬区立中村中学校

平成26年1月31日（金）

練馬区教育委員会
教育長 河口 浩

特別支援教育においては、学習指導要領で示されている「生きる力」を育む理念の下、生徒の障害の状態および発達段階や特性、地域や学校の実態に即し、創意工夫を生かした教育を行う必要があるとされております。また、生徒の経験を基に積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐむために、学校の教育活動全体を通じて、通常の学級の生徒との交流及び共同学習を組織的、計画的に行うこととしています。

中村中学校の特別支援学級「F組」では、平成15年度より本校舎3階に交流教室を設置し、交流及び共同学習を継続的に実施してこられました。そして、今年度はこれまでの取組を基盤に、練馬区教育委員会特別支援学級発表校として「共生社会を目指した交流活動」を主題に、通常の学級との交流及び共同学習の実践に取り組みました。本研究では、特別支援学級と通常の学級の生徒との関わりを、運動会や合唱コンクールの学校行事などの特別な機会のみならず、日々の給食や教科の学習の中で生徒の実態や単元の内容に応じて確立してまいりました。このことにより、特別支援学級の生徒にも迎える通常の学級の生徒にも、共に活動する中で互いを知ろうとする態度が身に付き、よい変容が見られたとのこと。今後、本校の研究成果が区内の全ての特別支援学級の指導の充実に資するよう願っております。

結びに、本研究についてご指導いただきましたこども教育宝仙大学教授 松原 豊 先生に心より感謝申し上げますとともに、日々の実践を大切に、研究を積み重ねてこられた中村中学校 渡辺 政義 校長をはじめ、教職員の皆様に敬意を表してあいさついたします。



練馬区立中村中学校
校長 渡辺 政義

本校の特別支援学級は昭和51年に開級され、今年で37年目を迎え、現在12人の生徒が在籍しています。これからの社会は全ての人々が協力し合う共生社会になっていくと考えられます。ですから、それぞれの立場でそれぞれの人々がもつ価値観を互いに認め合い、助け合いながら社会を形成していくことが大切です。

特に「交流教育」の充実を図ることは、生徒の自立への意欲を高め、基本的生活習慣の育成だけでなく、基礎的な知識・技能を養うとともに、互いに協力する態度を身に付けることにつながります。

このようなことから、これからの中学校における特別支援学級の指導はどのようにあるべきかを研究テーマとし、研究主題を「共生社会を目指した交流活動」としました。また、特別支援学級の生徒が定められた通常の学級での活動を通じて社会性や協調性を身に付けられると考え「交流及び共同学習の取組を通じて」を副主題として研究に取り組んできました。

ここまで取り組んできました研究と実践の一端を公開し、皆様にご意見をいただき、今後の指針として本学級の教育の充実を図るべく、なお一層精進してまいりたいと考えています。

このたび研究発表会を行うに当たり、このような研究の機会を与えてくださいました練馬区教育委員会に、心より感謝申し上げます。また、これまでの研究の推進に際しご指導いただきましたこども教育宝仙大学教授 松原 豊 先生をはじめ、ご指導いただきました多くの先生方に心より御礼申し上げます。今後とも本校の特別支援学級の教育に一層のご指導とご支援を賜りたくお願い申し上げます。

1 主題設定の理由

現在東京都教育委員会では、障害のある児童・生徒の将来の自立と社会参加を推進する取組を行っている（平成22年度・東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画）。また、自立と社会参加の推進のためには、普段とは異なる環境の中で様々な相手と関わる力が求められる。

本校では、平成15年度より本校舎3階に「交流教室」を設置しているため、通常の学級と同じフロアにある交流教室で特別支援学級（以下、本校の知的障害特別支援学級をF組と称する。）の学級活動や授業を実施することにより、特別支援学級の生徒と通常の学級の生徒が交流を行う機会を増やすことができた。

そのような環境のもとで、F組の生徒が、個々の生徒が定められた通常の学級（以下、交流学級）での活動を通じて、社会性や協調性を身に付けることができつつある。また、通常の学級の生徒も、F組の生徒と共に給食の配膳や食事をしたり、行事を行ったりすることにより、目指す「共生社会」に向けて障害に対する理解や他者を助ける気持ちを育むことができている。本研究では、「共生社会」を「連帯感を深め、他者との円滑な人間関係を築くことができる社会」と位置付けた。

これらの交流及び共同学習の取組をF組と通常の学級の双方にとって一層意義ある教育活動としていくために、交流及び共同学習の取組を組織化・体系化していく必要がある。

そのため、研究主題を「共生社会を目指した交流活動」とし、副題を「交流及び共同学習の取組を通じて」と設定した。

2 研究の仮説

交流活動に関する本校の特色として、F組が学級活動や授業を行う交流教室を本校舎の1年生のフロアに設置していることや、職員室の座席もF組教員が各学年に所属する形で設定されていることである。このような取組によって、生徒も教員も特別支援学級が身近にあることを感じることができ、スムーズな交流及び共同学習につなげることができる。

また、交流及び共同学習の取組を通じて、双方の生徒が関わり合うことにより、通常の学級の生徒は障害を理解し、他者を助ける心や思いやりの精神が生まれ、F組の生徒は集団の中で礼儀作法などの社会性やコミュニケーション能力などの協調性を育むことができると考えられる。

そこで、研究の仮説を以下のように設定した。

継続性のある組織化・体系化した交流及び共同学習の取組によって、特別支援学級の生徒と交流を受け入れる生徒に連帯感を深めようとする態度が育ち、他者との円滑な人間関係を築くことのできる生徒が育つであろう。

3 研究の概要

(1) 継続的な交流及び共同学習の実施

○年間を通じた日常的な交流活動

毎日の交流給食

○行事における交流活動

運動会、合唱コンクール、修学旅行・校外学習

(2) 交流及び共同学習を実施するための組織化・体系化の工夫

組織化の工夫として、F組教員が各学年に所属し、学年毎の会議に参加することにより、個別の指導計画を活用して生徒の情報を共有したり、学校行事ごとの参加方法について検討したりする場を設定している。

また、体系化の工夫として、学校行事ごとに、交流学級で参加する班や学級の生徒にF組生徒の個々の課題や様々な場面における対応について個別の指導計画を活用して説明している。日常での様子を想起しながら説明を聞くことにより、個々の生徒の特性や課題について、より一層理解を深めることができる。

(3) 交流及び共同学習の評価

○特別支援学級で各学校行事終了後に作文を書き、そのエピソードから生徒の意識を分析する。

○通常の学級において学校行事毎に活動の実施前・実施中・実施後における生徒の意識アンケートを実施し分析する。

○通常の学級において年間を通じた日常的な交流及び共同学習に関する生徒の意識アンケートを実施し分析する。

○学校行事や年間を通じた日常的な交流及び共同学習に関する教員の意識アンケートを実施し分析する。

4 平成25年度の交流及び共同学習に関する取組

○交流及び共同学習の目的

「交流及び共同学習ガイド」（文部科学省）には、「障害のある子どもと障害のない子どもが一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があるものと考えられます。交流及び共同学習とはこのように両方の側面が一体としてあることをより明確に表したものです。また、この二つの側面は分かちがたいものとして捉え、推進していく必要があります」と示されている。

○日常的な教育活動における交流及び共同学習

・交流給食

交流開始日 … 2・3年生は4月22日から、1年生は5月7日から毎日交流学級の生活班で給食をとっている。
取組の様子 … 配膳を担当している。マナーや学級独自の給食中のルールを理解して食事している。

・授業（保健体育）

今年度は、体づくり運動の中の体ほぐしの運動を中心に実施している。授業前に該当学級で授業時のグループとF組生徒の顔と名前を紹介し、円滑に活動に取り組めるように事前の指導を工夫している。
体ほぐしの運動のねらいである「心と体の関係に気付き、体の調子を整え、仲間と交流するための手軽な運動や律動的な運動を行うこと。」を特別支援学級の生徒と通常の学級の生徒が相互に関わりながら達成できるよう取り組んでいる。

○学校行事

・合唱コンクール

実施形態 … 交流学級の一員として、課題曲・自由曲を合唱した。
学習の様子 … 約1か月前から交流学級の音楽の授業に参加し、自分の担当するパートを歌い練習し、楽曲作りに取り組んだ。また、1週間前から朝練習（7:50～8:10）と放課後練習（2:05～3:45）にも参加し、個々の生徒に応じた音楽科の目標を達成することができた。

・運動会

実施形態 … 交流学級の一員として、個人種目2種目と学年種目に参加した。（個人種目→100m走と二人三脚、学年種目→全員リレー、1年いかだ流し、2年大縄跳び、3年オムカデ）。健康面等の配慮で、応援参加をした生徒もいた。
学習の様子 … 2週間前から交流学級の体育の授業に参加し、各種目の練習に取り組んだ。また、朝練習（7:30～8:10）や放課後練習（3:15～3:45）にも交流学級に入り、各種目の練習にも参加し、個々の生徒に応じた保健体育科の目標を達成することができた。

○学年行事 校外学習・修学旅行

・2年校外学習（鎌倉方面）

実施形態 … 交流学級の生活班の一員として参加し、係も担当した。事前学習や事後学習はF組独自で取り組んだ。交流学級でのコース決めや学年集会にも参加した。
取組の様子 … 班で決定したことを班員に教えてもらいながらしおりに記入したり、コースや食事などの話し合いで意見を言ったりした。当日は、終日協力して行動をとることができた。

・3年修学旅行（京都・奈良方面）

実施形態 … 交流学級の生活班の一員として、参加し、係も担当した。交流学級でのコース決めや学年集会にも参加した。
取組の様子 … 事前学習や係会等、班の一員として取り組んだ。当日は、就寝時のみ別部屋であったが、それ以外の活動は一緒に活動した。

5 通常の学級における生徒の意識の変容

(1) 日常的な交流活動における生徒の意識

学校行事以外の「交流についてのアンケート」を平成24年度末に実施した。

1・2年生には『F組の生徒とどのように関わっていききたいか』、3年生には『F組の生徒に対する考え方が変わったか・今後の生活にどのように生かしていくか』を聞いた。その中の主な意見は、以下のとおりである。

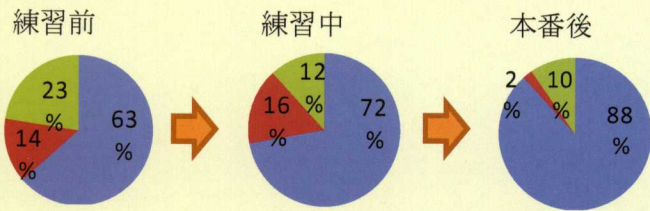
1年生	仲良くしたい。優しくしたい。差別なく普通に接していききたい。積極的に話しかけたい。協力して接していく。たくさん関わられるようにしたい。トラブルなく関わっていききたい。
2年生	これからも仲良くする。相手の気持ちを考え、分からないことを優しくフォローする。学級の一員として関わる。信頼できる関係をつくっていききたい。もっと交流を増やすと学級に溶け込めると思う。F組の生徒の良い所・悪い所を知り、楽しく関わりたい。ちゃんと対応出来るようになりたい。
3年生	自分たちと変わらない。当たり前だけど「同じ人間で、少しだけ苦手なことが多いだけ」。初めは偏見があったが、障害者のことやその人に対する考えが変わった。何も出来ないと思っていたが、「やるときはしっかりやるんだな」と思うようになった。みんな一生懸命で心を打たれた。障害者に対しての接し方が変わった。手伝うだけでなく、自分でやらせることも大切だと思った。過剰に優しくしたり厳しくしたりする必要がないと分かった。

アンケートをまとめるに当たり、1年生からは「仲良くしたい」、「トラブルなく…」等、表面的な関わりを連想させる言葉が多い。2、3年生からは「信頼」、「自分たちと変わらない」等、F組の生徒に対する考え方や理解が深まった言葉が出てきた。このように言葉の表現が変わったことから、継続して関わり合いをもち、個々の生徒の特性を理解していくことにより、身近な仲間としての関わり方ができるようになっていき、声かけや支援の方法など、F組の生徒に対する理解が深まっていったことがわかった。

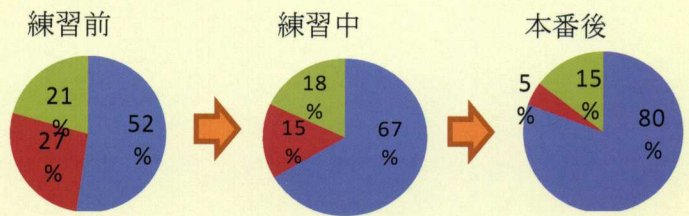
(2) 学校行事における生徒の意識 (合唱コンクール・運動会のみ掲載)

合唱コンクール 平成 25 年 3 月実施

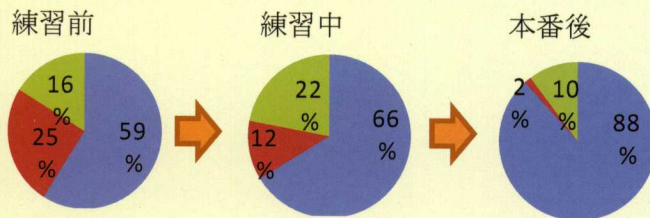
1 年生



2 年生

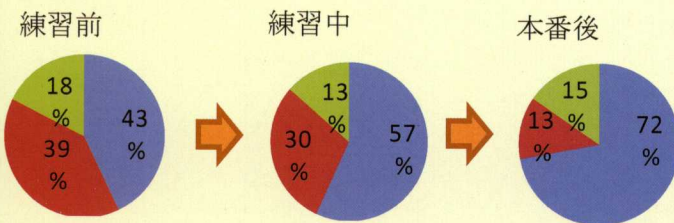


3 年生

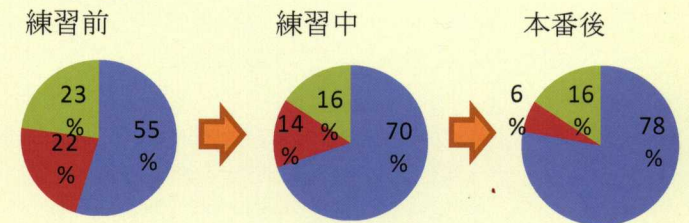


運動会 平成 25 年 5 月実施

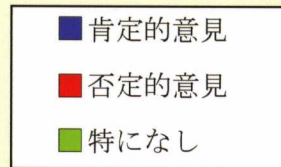
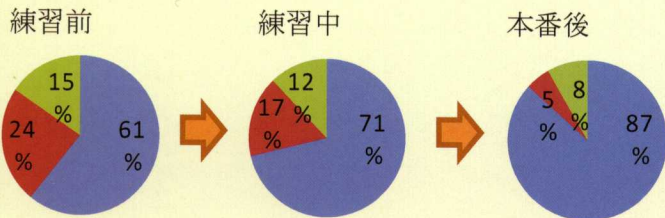
1 年生



2 年生



3 年生



平成 24 年度から各行事期間中に、「練習前の心境」、「練習中(実施中)の心境」、「本番後の心境」の三場面に
ついて、通常の学級の生徒に対し、F 組の生徒との交流・関わりアンケートを実施し、その内容を分析した。

1 年生 …多くの生徒が、初めて障害のある生徒と活動をした。日々の交流給食で、F 組の生徒の様子をよく見て、アンケートに答えている。F 組の生徒の特性や行動が理解できていないことや、どのように接していけばよいのか分かっていないため、不安が多く見られたが、活動を通じて肯定的に接することができるようになった。

2 年生 …昨年度 3 学級が F 組の生徒と交流をしているので、特性や行動を理解しつつある。また、今年度初めて障害のある生徒と接する生徒や、障害特性の違いを感じた生徒もいたため、練習前の心境に差が見られた。自分たちが、どのような支援をすればよい方向に行くのかを試行錯誤しながら F 組の生徒に働きかけていた。

3 年生 …入学当初から各学級に F 組の生徒がいたため、支援も行動の見通しも予測し、円滑に交流していることが分かる。「特になし」の回答には、「異性に対しての関わり方がわからない」という意見が多くみられた。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

ア. 生徒の変容

F組の生徒

- 3年間の交流活動を積み重ねることにより、交流学級への所属意識が芽生え、学級の仲間のために自分のできることをしようとする連帯感の向上が見られる場面が増えた。
- 日々の教育活動や学校行事を通じて、F組の担任だけでなく、交流学級の担任の教員や、学年の教員の名前を覚えたり、挨拶を返したりすることができるようになった。また、交流学級での活動に参加することにより、場面に応じた態度を学んだり、全体に合わせて自分のやりたいことを我慢したりする場面が見られた。
- 毎日の交流給食で、通常の学級の生徒と会話する時間が確保されることにより、半数近くの生徒に他者と円滑に関わっていくための協調性や、F組の活動の中だけでは得られにくいコミュニケーションスキルの向上が見られた。

通常の学級の生徒

- 学校行事で一緒に行動したり、F組の生徒の活躍を見ることで、声をかけたり、仲良くなろうとする雰囲気が生まれた。
- F組の生徒のまっすぐな気持ちに感銘を受け、素直な行動や思いやりのある行動を真似する生徒が出てきた。
- 日々の教育活動や学校行事を通じてF組の生徒に対する理解が深まり、生徒の特性を考えながら関わる姿勢がみられた。
- 交流給食をベースに行事を行うので、お互いに“クラスの仲間”という意識が強くなる。1・2・3年と学年が上がるに従って、F組の生徒との関わり方が自然になっていった。

イ. 教職員の変容

- 個別の教育支援計画や個別の指導計画等の個人資料を基に特別支援学級の担任と通常の学級の教員がF組の生徒の課題とその指導の手だてを共有し、一貫した指導や支援を実践することができるようになった。
- 日々の交流活動や行事における交流及び共同学習が組織化・体系化されることにより、教員も見通しをもってF組の生徒を受け入れられるようになってきている。

(2) 課題

ア. 日常的な教育活動における交流及び共同学習

交流給食

- 日常的な交流及び共同学習の中で、言葉遣いや態度等良いことだけを学んでくるとは限らないので、道徳教育の充実や教育活動全体を通じて、善悪を判断し、誠実に行動する道徳的態度を育成する必要がある。
- 各交流学級へ給食を食べに行くため、食事のマナーや食べ方などの個別指導は行いにくくなる。それを補うために、個々の生徒の課題に応じて、交流給食へ行く前の4月や宿泊学習の際にF組で食事指導を行う。
- F組の全生徒が各々の交流学級に参加する活動のため、F組の担任だけでは支援体制を整えることが出来ない。よって通常の学級の教員とより一層の組織的な支援体制を整える必要がある。

授業

- 学校行事の事前学習や保健体育だけではなく、他の授業においてもF組の生徒と通常の学級の生徒が共同学習できる場を増やしていけるように改善する。また、その場合は関わるすべての教員と報告・連絡・相談・記録などの連携が必要となる。

イ. 学校行事における交流及び共同学習

- 運動会・合唱コンクールなど、勝敗が明確となる行事で通常の学級の生徒にどのように説明をしていくのか、行事の取組に対する教員の共通理解が必要である。
- 校外学習や修学旅行は通常の学級の班行動に参加するため、F組の生徒すべてに教員の目が届かない。そのためF組の生徒が参加する班の生徒に対し、事前に対応の仕方や声のかけ方などの説明を行う必要がある。

ウ. その他

- 交流活動をより一層充実させるため、交流教室の活用の仕方を検討する必要がある。例えば、交流給食でF組が通常の学級の生徒を招待するという形をとり、通常の学級の生徒を交流教室に招く「招待給食」を実施するなど、通常の学級の生徒がもっと交流教室を利用する機会を確保していく。